

全体会議 「ネットワーク日本研究」

問題提起

長友 和彦

この全体会議のテーマ「ネットワーク日本研究」には、グローバルな日本研究のネットワークを築きたいという期待が込められているが、そのためには先ず、諸外国において日本研究がどのように進められているか、その実態を把握する必要がある。その実態の把握を第1の目的として、ここでは、今回海外からお招きした方々に、次のような点についてシンポジウム形式でお話しいただく。その上で、できれば、実態の解明に伴い、グローバルな日本研究のネットワーク、連携のあり方も浮かび上がってくるよう、討議を進めたい。

それぞれの国における①大学での日本学関係の研究組織、教育組織の実態、教員の専門分野、②日本学関係の図書、資料等の整備状況、③学会組織の実態（どのようなくくり・単位のどのような名称の学会組織なのか、主にどのような活動をしているのか、etc.)

基調報告

イギリスにおける日本研究の現状

ジョン・ブリン

簡単に、イギリスにおける日本学の実態についてご説明します。

まず、現在における日本学について説明してから、私が所属している SOAS における日本学・日本語学について説明しまして、3番目としては、横断的で学際的な全英の BAJIS (British association Japanese studies) についても、簡単に説明します。

まず、英国全体における日本学・日本語学の実態について申し上げますと、現在、50以上の大学で、日本学・日本語学(日本語)を学習できるようになっています。そのなかで、伝統的な日本研究と言えば、オックスフォード・ケンブリッジ・ロンドン大学、それにプラス、シェフィールド大学を付け加えてみますと、戦後、4つの大きな日本研究(日本語研究)がさかんに行われている大学・大学院のある国です。その他にも、戦後、Leeds 大学・エジンバラ大学などで、日本研究(日本語研究)をやっていますが、どうしても社会科学的重みがあるので、そういった意味では、ロンドン大学・オックスフォード大学・ケンブリッジ大学が、特別な存在と考えていただけたらいいかなと思います。というのは、平安時代・またはそれ以前の文学・歴史、それから戦後の政治史・経済史まで、網羅的に